

News! the 世界遺産

『鎌倉彫をめぐるあれこれ—鎌倉彫を世界遺産に?』 三浦勝男さん講演会、開催

2007年11月23日(金)、
鎌倉市立御成小学校体育館
で、伝統鎌倉彫事業協同組
合と鎌倉世界遺産登録推進
協議会主催の、鎌倉彫と世
界遺産登録に関する講演会



が開催され、三浦勝男さん(鎌倉国宝館館長)による『鎌倉彫をめぐるあれこれ—鎌倉彫を世界遺産に?』と、岩下英夫さん(神奈川県工芸指導所鎌倉支所長)による『伝統工芸“鎌倉彫”中世の輝きを今に』の講演が行われました。当日会場には予想を上回る参加者が集い、頼朝の時代に起源を発する鎌倉彫の歴史と魅力、新たな可能性に熱心に聞き入りました。

◎三浦勝男さん講演要旨

鎌倉彫の本源は、“鎌倉仏師”である、といわれています。その本姿は彫刻であることを考えますと、間違いないことでしょう。

鎌倉に初めて仏師を招いたのは、武士の町を築いた源頼朝でした。文治元年(1185)頼朝は、南都(奈良)の大仏師である成朝とその弟子たちを鎌倉に招引して、勝長寿院の本尊である丈六(約4.85m)の阿弥陀如来像を造らせました。

成朝は、南都仏師の正系で、当時は興福寺を中心に活躍していたとみられますが、残念ながら後継者がなく、系統は絶えてしまい、鎌倉に根づくことはありませんでした。

その後、相応の仏師が鎌倉に来ますが、現在にまで影響を与えたとみられるのは、有名な運慶(1223年没)の登場でした。彼の作品は、文治2年(1186)伊豆菰山の願成就院と文治5年(1189)横須賀浄楽寺に残されていますが、鎌倉へ来たかどうかはわかりません。

力強い作風は、鎌倉の武士に好まれ、その流れをくむ仏師たちが引き継いで仏像を造り、やがて鎌倉仏師が誕生しました。初祖は、幸有といわれ、遺品は建長3年(1251)作の円応寺初江王坐像ということになっています。

建長5年(1253)に、禅宗修行の専門道場である建長寺が創建されてからは、鎌倉を中心とした禅宗文化の影響は多大で、建長寺に残る重文須弥壇は、鎌倉彫の最も

古い作品といわれています。

とはいえ、かつて鎌倉に存在した仏所や大工所の存在も忘れてはならないと思います。例えば、鶴岡八幡宮に付属した鶴岡仏所は、大仏師加賀法印や大工岡崎氏の世襲。建長寺仏所は、仏師運朝とその一派が活躍した拠点ともみられ、大工においては、扇ガ谷住の河内氏が引き継いで活躍されました。

円覚寺仏所は、大工高階氏が、そして寿福寺仏所の確認もされ、寿福寺門前に居住した鎌倉仏師のすばらしい活動は、現代鎌倉彫の下地を練り上げた、といえましょう。

加えて、宅間仏所の存在も重要であります。現在の報国寺や華頂宮邸のある谷は、宅間ヶ谷とよばれ、京都の宅間為遠の三男為久ためひさとその一派が居住し、関東宅間派を形成した、いわば“宅間派工房”とみられる場所なのです。その遺品の一つに西御門来迎寺の地藏尊(旧報恩寺本尊)があります。

しかし、鎌倉幕府の滅亡から徐々に造像を依頼する檀那の存在が薄くなり、近世の江戸時代には、尊像の製作は少なくなり、仏具や食器のたぐい、あるいは位牌や建造物の一部彫刻などに仕事の範囲を広めていったことがわかります。

先般、東京芸大大学院の教授で彫刻家の藪内先生にお目にかかりましたおり、「後藤運久の模刻像を拝見しましたが、実にうまいもんだね。あのようには、なかなか彫れないよ」と申されておりました。運久こそ、現代鎌倉彫の基盤を築いた人なのです。

同じく昨秋のこと、平安仏所の江里康慧師の夫人で、きりかね截金の人間国宝佐代子氏にお目にかかりましたおり、「鎌倉彫に截金をほどこしたらどうなりましょうか」と伺うと、「おもしろい、機会がありましたらやってみたいですね」と申されておりましたが、残念ながら、去る平成19年10月、62歳で他界されました。お話の終わりちかくに、「鎌倉彫は、世界に一つしかない鎌倉の遺産ですものね」と結ばれた一言が胸に響きました。

同じように、武家の首都鎌倉も、世界に一つしかありません。拙題に「鎌倉彫を世界遺産に?」と付したのは、ともかく、かまぐらの伝統技術を後世に伝える、鎌倉びとの心の遺産、と考えて頂ければ幸いですからにはほかありません。(鎌倉国宝館館長)